平成四年度　春季公開講演要旨

『華厳経』の人間観

本学教授　鍵　主　良　敬

私にとっては、仏教といえば「華厳」です。それを自分の拠り所にして色々な問題を考えてきました。そこで『華厳経』ということで、『華厳経』の何だろうと思いました時に、仏教とはいいながら仏教学を学んでいる私自身が、自分が人間であることへの関心を捨てることができない。人間とは何なんだろうと。そして人間といいましても、どこかに誰でもない人間そのものがいる、というのではなしに、私自身がこの逃げも隠れもできない現実のなかに投げ出されている。有限の人生の中に私はいる。つまり天上界の一番下の天である四天王天の一日一夜が人間の五十年というような、あっという間に飛ぶように時間が過ぎていってしまう。百年といってみたところで、たった二日に過ぎないような、人間世界。そういう中で、私自身は、仏教といっても人間の抱えている問題をこそ明らかにすることではないかと、そういった観点を長い間捨てることができなかった。ですから、そういう点で、「『華厳経』の人間観」という題にした訳です。

しかしよく考えてみると、実際問題として私を長い間おびやかし続けてきたような、気宇壮大というのか、わからない、底が知れないという、どこが尻尾なのか頭なのかわからないようなもの。仏教にはそのような面がある。仏の成道というのは、想像を絶する事柄であって、仏陀が生まれたということは、人間の精神史そのものが引っ繰り返されるような、とてつもない大きな意味をもっている。一人の人間として王宮にお生まれになりながら、その人間そのものを、本当に超え出られた。したがって、人間というものは超えられなければならない。六道輪廻といわれるような六つの状況の中の一つ、その人間界は、天上界の一番下の下天と比べても、まことにちっぽけなもの、情けないものである。その意味において、超えられるべきものとして六道はある。だから仏陀は生まれた時に七歩あるいたという伝説がある。そのように強く感じておりました。

ですけれども最近になりまして、人間成就とか人間としての完成、というような言い方が多少目に付くようになった。そこで「華厳」というその華、仏華厳、そしてそこには広大無辺際というのか、捉えどころのない、仏の悟りそのものというものが確かにある。それに対して我々自身は流されているかも知れない。しかしその一・二日はそれでいいのではないか。我々が人間として生きるというそのこと、それ自身としての完成のこと。それが華を開くことである。華といえばそれを開くこと。そしてせっかく華を開くのならば、徒花で終わらずに実を結ぶこと。それが完成ということであり、道があるということだ。というようなところで「人間開華」、人間として華を開く、蕾のままでは死ねない。途中で朽ち果ててはいけない。そういう人間。そのことが人間成就という言葉でいわれているように思うことです。

しかし『華厳経』が人間というものをどう見ているかということ。これはとても難しい。この題は少し羊頭狗肉すぎる。あまりにも『華厳経』が見ている人間というようなことは難しすぎる。

そこで『華厳経』を通して長い間仏教を学んできた私が、ほんのささやかなところで、人間というものはこういう問題をもち、こういう問題の解決をめざして生きるものであって、そこに本当の人間というのか、これこそ間違いのないものだというその人間、あるいは人生そのものの課題というようなものを求めずにはおれない。そのような人生というものが開かれれば、それは以て銘すべしとなる。そのような意味合いにおいて、『華厳経』から人間について学んだものということでの人間観ということにしたい。

その点で広大無辺な『華厳経』のある形としての手掛かりとなると、「入法界品」になる。法界という法そのもの、真実そのものに入ろうという課題、つまり菩薩、菩提心の歩み。そこに善財童子と名付けられる青年が登場して、五十三人の善知識を訪ねる。また、そこで求められている仏そのものは毘盧舎那仏といわれる。

その善財童子の出遇った二、三の「先生」、あるいは「友」と言ってもいい。原語は同じになります。教える者と教えられる者です。しかしそれはある意味で友達のようなものだという。そのような意味合いも大変深いものをもっていると思う。そういう出遇いといわれるものの中で、人間ということで気が付いたことがある。つまり「人身を得ること難く、仏法を聞くこと難し」という。「三帰依文」の最初のところにも「人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く。云々」という出だしがあります。人間として生まれることは大変難しいことである。生まれてしまえば当たり前みたいに思っている。けれども、とてつもなく難しいことだという。これは別に『華厳経』だけにいわれている訳ではありませんが、そういう言い方で善財童子がある善知識と出遇う。人間には、様々な困難な問題がある。それらを解決することは大変難しいことである。いずれにしても、人間というものはあり得べからざるものを、我々自身は獲得しているのではないかというような人間観。そのことと、もう一人の善知識の言葉として、人というものは幸せを生み出す田圃である。様々な善きものを生み出す。つまり善根、善きものを生み出す根のようなはたらき。それは人間というものが、そういう意味合いをもっているということです。人間であることが幸せを生み出す田圃であるということを、私はこの『華厳経』「入法界品」の中で今回改めて再確認しました。

こういう人間観というものは一体何を言おうとしているのか。善財童子が求めに求めた。そうせずにおれなかった。その問題というのは一体どういうことなのか。そういったことが課題となってきたということです。その点で善財童子が求め、訪ねる。勿論「自分は菩提心を起こしたが、その起こした菩提心がよくわからない。そのことを教えて欲しい」というように尋ねる。そのような形を主にとりながら、善財という善き財産。その名前が象徴的に表しているもの。生まれ乍らにして素晴らしいものを与えられていると言われている。そしてそれが童子。幼子。そして青年ということになると、それはひたむきさ、一筋さとなる。脇目をふらない。「これだ」、というような率直さ。要するに人間の問題はここなんだ、というのか。よくわからないけれども、子供心にも匂いがする。子供だからといって馬鹿にできないというような、そういう問題を含みながら、純粋さ、素直さ。無心、無邪気。だから、そういう心というものは、非常に事柄の本質というものにかなうような側面をもっている。

善財童子が道を尋ねずにおれなくなるという、その心。ですか

ら若さそのものが童子である。その点でみると、肉体的にいかに年をとっていても若々しい人はいくらでもいる。逆に年齢は若いはずだが、精神はまことに老い衰えているというような状況もいくらでもあり得る。要するに童子というような若さのもっている素晴らしさというのは、純粋さ、そしてそれはまた潔癖さでもある。胡散臭いものを嗅ぎ付けることのできるような能力とでもいえましょう。そういう側面を含めて童子という。ですからその若々しさが宝物である。

善財童子は文殊菩薩の示唆によって道を求める。文殊菩薩は智慧の象徴である。それと出遇う。そこで文殊によって目指されているものは普賢の道である。普賢菩薩というのは歩み、そして願い、普賢の願行です。人間には人間に生まれたということ、人間として生きていることに即してのとてつもない願いが、どこかにあるはずだ。要するに文殊菩薩が「普賢を目指せ」と言われる。ところがその文殊菩薩は「入法界品」においては、文殊師利童子として出てくる。文殊菩薩といいますから大変立派な菩薩であり、素晴らしい菩薩である。とても手の届かない菩薩である。仏とはいえないが、それに近い菩薩である。またそれに間違いはないのです。しかしそれも童子と言われる。そうすると善財童子という童子、あるいはその若さというもののもっている本当に純粋な意味ということは、一体どういうことなんだろうか。童子自身が童子というその中から深く自分自身の問題を問い掛けられて、一応文殊菩薩によって呼び覚まされてはいるが、それは人間自身の問題だと、このように言い切ってもいいことになる。

その文殊菩薩の教えに出遇った時に、善財童子は現在の自分はこんな状態だとでもいえる自覚が生ずる。つまり最初に文殊菩薩に出遇って、自分を見せ付けられたことになる。その自己確認とは「有」ということから始まる。あるということです。自分というのはあるということに執われているということ。いわば存在しているということ。それは生きているということに関わるかも知れない。その「ある」ということに縛られている点が問題だというのです。

それからすぐに高上がりしていくということ。のぼせあがる。所謂高慢になるという点。また、自分自身はなんでこんなに汚いんだろう、というような面。そして悪魔に自分自身の一番大事な所が乗っ取られてしまっている。主体的だとか、自己自身だとか言いますし、人間が問題だということは、自分自身が問題だということになる。が、その自分自身と言っているその自分。母屋を乗っ取られているというような感覚なんでしょうか。悪魔を君主と為しているという自覚に達する。そして童蒙。童子の童に、無知蒙昧の蒙という、要するに幼稚さ。つまり童子とは若さだとか純粋さ無心さだと言いました。けれども若さそのものは、どうしても幼稚さ、薄っぺらにしかものが見ないという欠陥がある。どうしてこんな浅薄なものの見方しかできないんだろうという、自分自身の幼稚さ加減に呆れ果てるといったらよい。

そのような自己確認というところから始まって、なんとかしたいという心が生ずる。こんな情けない自分自身をそのまま野放しにしておけない。なんとかならないのか。本当の自分、あるべき自分というのは一体何なのか。そのことを求めざるを得なくなる。自分の幼稚さが情けなくなる。それが童子という問題を考えるについての手がかりです。また、人間が幸せを生み出す田圃だということを明らかにするについては、その人間の心ほど恐ろしいも

のはないということが問われている。つまり悪魔が私自身の心の中の奥深い所に住み着いていて、チラチラとその正体が見えることが問題だというのです。悪魔的なるものという表現もあります。

善財童子が様々な善知識を尋ねます時に、時として悪魔の問題を解決したいということで問い掛けます。そういうことでこのお経を見直してみますと、それは「離世間品」ですが、悪魔といっても煩悩のことだとか、あるいはその業のことだとか、我々の心そのものが悪魔なのだとか、せっかく素晴らしいチャンスを与えられながら、それを失うようなものが魔であるというような言い方がなされる。それと同時に、菩提心を失ってどれだけ素晴らしいことをしても、それらは全て悪魔の業になるとか、真実の教えを教えなければならないのに、一番大事な所を惜しむというようなもの、あるいは利養の為、つまり利益を得る為に、教えを説く。それは悪魔の業だ、とか。人はそれぞれあり方があるのだから、教えを説くならば、それらしく相手に対して適確に問題を明らかにしなければならない。ところが見境なしに相手構わず教えを説こうとする。それは、悪魔の業だとか。自分の説は正しい、相手の言うのは間違っているというように主張するのは、悪魔の為すところだとか。増上慢、のぼせあがる。事実を認められない。素直でない。そのような悪業。善財童子は、自分自身が悪魔に乗っ取られているのではないかというところに気付かされて、そういう自分を厭わずにおれなくなって、本当のことを知りたいということになってゆく訳であります。

この童子は、無心にひたすらに道を求めて方便命婆羅門という婆羅門に出遇います。その前に堪え忍ぶことが問われる。つまり人生の問題でも人間でも、なかなか正体をあらわさない。しかしあきらめずに求める。あきらめきれないから求める。それが大事だという意味でしょうか。その「忍」は忍辱の忍、その忍はまた認の意味にも使いまして、無生法忍ともいう。生ずることのないような法の認ということ。ですから無心。ひたすらに求めていくしかないということがいわれる。

善財童子は何人もの善知識によって教えられた後で、この方便命婆羅門に教えを乞いに伺います。その時に、「自分は菩提心を発こしたけれども、どうやって菩薩の歩みというものを学べばいいのか。どのように道を修すればよいのか。それを教えてほしい」とお願いする。その時にその婆羅門が、刀の山、剣のように尖った山でしょうか。その山の頂に登って、そこからその山のふもと、山の火口なのかも知れませんが、火が燃え盛っている。その「火の中にお前が飛び込めば、菩薩の行というものは明らかになる。清らかになる。だからその山に登って飛び込め」と。このように教えられる。その時に善財童子が、人間というものは生まれ難いものではないのか、あるいは様々な困難な出来事というのはなかなか解決するのは難しいことではないのか。そして仏の教えに出遇うということも大変なことなのではないか。善知識に遇うということも本当に難しいことではないか。それなのに剣のような山の頂に登って火の中に飛び込め、という。これは悪魔の言葉ではないか、と疑う。悪魔が善知識の姿を現しているのではないか。善知識魔という先生のような顔をした悪魔もいると、こういうまことに恐るべき言葉もこの『華厳経』の中にある。

善財童子は悪魔が自分を殺そうとするのじゃないか、正しい教えではない偽物を自分に教えようとするんではないかと疑う。その時に、これも『華厳経』ばかりでもありませんが、神々の神で

ある梵天、ブラフマン。天の声が聞こえる。というのはこれは何でしょうか。よくわかりませんが、「悪魔じゃない。思い切って飛び込め」という。そういうささやきがどこからか聞こえるという形をとる。どう見ても悪魔の言うことではないかと思われる。そのような言い方をしている。しかし、「そうではない。その言葉に確信を持て」という声が聞こえる。純粋なものというのか、本当に虚心に、ひたすらとかひたむきに対処すれば、その智慧というものは事柄と一つになる。知るものと知られるものが一つだから智慧。虚妄分別としてバラバラになるものが知識。だから「識に依らずに智に依れ」と。こういう言い方は『華厳経』そのものにもあります。そういう直観とでも言うべき本能的な、声が聞こえる。少し神秘的なことになるかも知れませんが、天の声が聞こえて、そこで飛び込んでみる。そうすると途中まで行くか行かないかに静かな安らぎの状態が実現する。火の中に落ち込んだと思った時に、静かな光輝く世界を獲得した。確かにそこに自分自身の身をかけた。思い切ってぶつかってみたところが、安らぎの世界が実現したという。

注釈家もこういう問題には困り果てたとみえまして、これは「方便で現しているのだから方便命婆羅門だ」という。また華厳の場合には事実そのものが事実を語っているので、それは決してゆるがせにできないというような点から「説明の仕様がない。そのままの事実だ」という説もある。傍目で見るよりも思い切って飛び込んでみると、そこには必ず突破口が開かれる。逃げ回っているからなかなか問題は解決しない。だが思い切って、逃げ隠れできないから逃げ損なって止むを得ず、追い詰められたところで思い切って、問題そのものに身をかけてみる。すると案外に思っていた程のことはないというようなことは往々にしてある。それが今、「人身受け難し、仏法聞き難し」という文脈の中で言われているということです。

それともう一つ、先程の、「人というものが福田である」ということなんですが。これは満足王という王様ですが、その王様を訪ねました時に、これも当たり前かも知れませんが、悪いことをした者、悪業を犯した者はそれに相当するだけの刑罰を必要とする。その刑罰というのは、手や足を断ち切るとか、目の玉をくりぬくとか、鼻を削るとか、首をちょん切るとか、煮えたぎる油の中に投げ込むという、甚だ過激な刑罰が課される。それが菩薩なのか善知識なのか。自分が教えを乞うその菩薩がなるほど国王として国を統治しなければならない。だからこそ刑罰は必要だという。そのことは勿論わからないではない。しかしあまりに残虐すぎるではないか。それが教えを説く者の為すことなのか。そういった疑問を持つということです。その時に満足王が、それも方便という。手立てだとか、仮にあらわしているというようなことですが、それよりも、もっと切実な問題があるということです。

その王自身は「私は蟻の子一匹害そうと思うような心を起こしたことはない」と。「だからどうして人間を害そうなどという心を起こすだろうか。人であるというそのことが幸せを生み出す田圃であり、素晴らしいものをそこに生ずるではないか」という。ですから方便命婆羅門の教えも、この満足王の教えも、共に悪魔にしか見えないという形をとっている。そして善知識の形をした悪魔もいるということを言いながら、悪魔にしか見えないようなそういう姿をとって、そこに本当の善知識もあると言おうとする。しかも自分自身の最も大事なところに悪魔は住んでいるというこ

とも問題になってくる。そういう自覚に立って善財童子は、菩提心を発さざるを得なくなっている。そのような大変屈折した問題提起がなされる。人間の隠れた心の奥底のようなところに恐るべき問題が潜んでいて、それを何とか解決したいという。そこから解放されたいという願いを持たざるを得ないところに、初めて菩提心を発すというような、初発心の問題があるということです。

そのことと今の満足王という王様、非常に残酷な刑罰。幻のように現しているだけだという法門を「私はお前に教えたい」ということなんですが、幻であっても残酷は残酷である。しかしそういう残酷なことも、逃げる訳にはいかない。時としてあり得るということなんでしょう。ですから黙して語らないという注釈もある。この辺のところも改めて大きな課題として、簡単にわかったとは言えないことを思い知らされる。その点につきまして、その満足王のことを別の訳では甘露の火の王、甘露火王といいます。甘露というのは甘い露ですから、人間として、人間の問題をそこで問うとするならば、そこに喉を潤すような意味合いをもった王様。しかしそれは火。ものを焼き尽くす。甘露の火というのは、非常に暗示的です。『四十華厳』ではそういう名の王となりまして、先ほどのような刑罰を与える。悪をなしたならばそれだけの責任をとれということを教える。幻にせよその責任を問うということです。

そのことを王様が現すに先立ちまして、婆羅門が登場して、素晴らしい王様だと誉め讃える。誉め讃えられたとしても善財童子はこれが本当に善知識なのかという疑問を持ちながら、そこで深い教えを頂戴した、といえる。その王を誉め讃える婆羅門の言葉の中に、要するに「三世のことを知らないことが問題だ」という。現在こそが大事である。「この身今生において度せずんば」で、この現在こそ本当に深い意味をもっている。しかしそれには背景がある。そして測り知れない未来がある。そういう三世のことを知らないところに、真実、せっかくの真実、宝物のような真実を、聞きかじるだけで終わらせる。ほんの少ししか触れられないことになってしまう。空腹のために腹を満たすということはある意味での生理現象ですから大事です。しかしそういった生理現象さえも、自分の欲である深い貪欲の心を野放図に膨らませていく素材にしかしない。それは人間の姿形をしているが、内実は人間ではない。業は三悪道に堕ちているんだと。しかも人間の格好をしているだけに、恐るべきえげつなさである。人間ほど恐ろしいものはないという、えげつないものはないという、まさに悪魔を君主としていることになる。

そういうことを言いながら、わずかしか学ばないから、その心はすぐ高慢になる。まるで、牛の足跡が雨水ですぐ満たされるようなものであるし、鼠が手に何かものを持って自分はたくさん持っていると言うのと同じである。そんなちっぽけなわずかなところでものを学んだとか、聞いたとか勉強しようとしているとかと情けないことを言うなという。智慧の海というのは測り知れないのであって、それこそが、お前自身が文殊菩薩から敢えて童子という形で問いかけられた課題ではないのか。ところがそういう広いものを、測り知れないために、自分の測り知れないものに対して、逆に謗りをなす。自分の手に持てないものには、恐れおののくことになる。

そんなことを含めまして、牛が水を飲めば牛乳となる。つまり人を育てるものとなる。ところが蛇が水を飲めば毒となる。人を

殺すものとなる。同じく水なのにその関わり方によって全く別のものになる。智慧ある者が学べば、生きているということと歩むこと、あるいはものを学ぶことと自分の存在そのものとが一つになっていく。つまり無生法忍とか、一如とでもいいますか。そういうところから学べばそれは真実を求めようという心になる。けれども、愚かな者が学べばそれはかえって、生死の一大事という、生と死という人間そのものの抱え込んでいる最も解決困難であると同時に、誰でもが何としてでも乗り越えなければならないような大問題。それが恐ろしいものとなって我々をおびやかす。要するに学び方、つまり主体性そのもの、そのことが問われるのであって、そこのところが明らかにならなければ、わずかしか学んでいないことの過ちの為にひどい目に遇うのは当然であろうと。そういう婆羅門の、甘露の火といわれる王様への讃嘆の後で、先程のような、手足をバラバラに切断するという刑罰も事実として必要であるということになる。しかも尚且つそこに人間そのものが幸せを生み出す田圃であると。蟻一匹殺そうなどとは決して私はしていない。人間程大事なものはないという。そのように思い知りながら、尚且つ厳しい刑罰を行なうのだと。

そこで善財童子が教えられているものは、かなり深い問題を提起している。そういうことで文殊菩薩の勧めによって普賢をめざす。そして最終的に普賢菩薩にお会いする。その前に弥勒菩薩に会うことができまして、ご承知のとおり五十六億七千万という未来の仏というか菩薩、その弥勒菩薩が善財をほめ讃えまして、「お前の菩提心はそれでいいんだ」といいます。その時に「お前は自分の一生涯を尽くして三世のことを見たからそれでいいんだ」とおっしゃる。そうすると我々の、下天に比べればたった一日か二日に過ぎないようなささやかな人生。時にはおびやかされる問題もあれば目を背けたくなるような問題もある。これが本当に教えなのかというような問題もあるでしょう。こんなことから何を学べというのかと思わざるをえないようなことがあるかも知れません。しかしそれらを通してお前自身の人生そのものが一日であってもいいじゃないか。二日であってもいいじゃないか。それで三世のことを学ぶ。深い背景があって、しかもまた限りない未来に向かっての一日であり二日であったというような、この生涯そのもののもっている無限の深さ。それを見出だすことのできるほど素晴らしい幸せはないだろう。

そういうものとしての人間こそが華を開くという意味であろうし、実を結ぶということにつながるのであろう。しかしその時には我ながら目を背けたくなるような悪魔的なるものとの格闘といいましょうか。どうしてこんなにと、我ながら情けなくなる問題をこそ、敢えて事実ですからごまかさずに見る。そういう問題の中に逃げ隠れせずに、飛び込んでみる。そこでこの人生そのものを過ごす。そのような意味での人間観、人間の見方ということが私自身の大変不十分ではありますが、『華厳経』から教えられたところなのであります。